

第1回 「小単元のパフォーマンス評価」の実践例

東京都板橋区立赤塚第二中学校 主任教諭 中野英水

1 はじめに

最近の教育界では、パフォーマンス評価という言葉をよく耳にする。平成27年8月に出された、いわゆる「論点整理」の中に登場し、新しい学習指導に対する評価方法として注目されているのであろう。学習指導の方法が変われば、それを評価する方法もかわるのは必然である。新しい学習方法がさまざまなところで研究され、実践されてきているいまこそ、新しい学習評価についての議論を高めていきたい。

2 今、なぜパフォーマンス評価なのか

平成26年11月の文部科学大臣諮問にアクティブ・ラーニングの言葉が出てきて以来、学校現場では、グループによる協働学習をはじめとして、さまざまな主体的・対話的な学習方法が取り入れられてきている。また、学校教育法第30条第2項に示された、いわゆる「習得－活用－探究」をもととした学習スタイルが現場レベルでも数多く実践され、さらに次期学習指導要領では「何を学ぶか」といった知識や技能の習得だけでなく、「どのように使うか」といった習得した知識や技能を活用して思考力・表現力の育成を重視し、「何ができるようになるか」といった社会や世界と主体的に関わりよりよい人生を送るための資質・能力を育むことが求められることになる。

このような中でこれからの学習スタイルは、

主体的・対話的な学習方法を工夫し、深い学びの実現に向けて革命的な変化を続けている。またESDの視点に立った授業づくりもおこなわれ、よりよい社会や世界の構築に向けて、さまざまな人々と協働しながら「今、自分は何をすればいいのか」といった最適解をめざす学習も重視されるようになった。

このような劇的に変化する学習を、従来通りの評価方法で、果たして適切に評価できるのだろうか。ここに新しい学習評価の必要性があるのである。前述のとおりこれからの学習は、知識や技能の習得のみならず、これを活用して思考・表現し、よりよい社会や世界の構築に向けての主体的な人間性を育成していくのであるから、ペーパーテストや単なる作品評価だけではなく、この学習プロセスを反映した総括的な評価方法が必要になる。平成28年12月に出された中央教育審議会答申でも「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組みさせるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である（p.61）」としており、新しい学習に対する代表的な評価方法としてのパフォーマンス評価の有効性を示している。

3 パフォーマンス評価とは

ここでは、先行研究の成果をもとにしながら、筆者の実践を加えて説明する。

まずパフォーマンス評価の構造である。パフォーマンス評価とは、パフォーマンス課題とルーブリック（評価の指標）を生徒に示して取り組ませ、示したルーブリックにもとづいて評価していく評価方法の総称である。ゆえに、パフォーマンス課題の特徴とルーブリックの特徴をよく理解しておく必要がある。この三つを整理すると、以下ようになる。

「パフォーマンス評価」

・観察、対話、実技テスト、自由記述による筆記テストなどを手がかりとして、知識や技能の活用を含めた思考力・表現力などを総括的に評価する評価方法。

「パフォーマンス課題」

・パフォーマンス評価を実施する際に提示する、具体的な事例を設定して構成された学習課題。知識や技能を総合して活用する要素を含む。

「ルーブリック」

・パフォーマンス課題に含めた知識や技能の活用を見極めるための要素を含む記述から構成されている評価の指標のこと。

(先行研究をもとに筆者作成)

ここで述べているパフォーマンスとは、単なる生徒の活動を意味するのではなく、知識や技能の活用を含めた思考力・表現力などを総括的・一体的に発揮した生徒の学習活動を意味すると筆者は解釈しており、単なる実技テストを意味するわけではないと考える。つまり、パフォーマンス評価で大切なことは、知識や技能の活用を含めた思考力・表現力などを総括的・一体的に発揮させる課題になっているかということである。生徒の個人論文という課題でも、設定された課題が、生徒のパフォーマンスを十分に発揮させるものであれば生徒の動きはなくてもパフォーマンス評価といえるであろうし、ロールプレイや口頭発表であっても、生徒のパフォー

マンスが発揮させられるものでなければ、生徒の動きはあってもパフォーマンス評価ではないと筆者は考える。

パフォーマンス課題やルーブリックの作成にあたっては、その単元の学習における生徒のパフォーマンスを十分に反映するものでなければならない。それを実現するには、その単元における学習目標を明確に設定すること、その学習目標を達成するために必要な知識や技能を習得させるための学習指導を単元指導計画の中に設定すること、さらには習得した知識や技能を十分に活用して思考・表現する学習を設定することが重要である。この単元構造ができていないと、いくら素晴らしいストーリーを設定したとしてもその意味をなさないものになってしまう。西岡加名恵先生(京都大学大学院教育学研究科准教授)らの研究では、「逆向き設計」論による単元指導計画の作成を提唱している。「逆向き設計」論とは、単元の学習で最終的に身に付けるべき学習成果から考え、その実現にはどのような学習が、どのような順序で必要かを考えるものである。社会科や各分野のめざすものを受けての単元の目標を意識しながら、単元や授業をデザインしていく。その中にパフォーマンス課題やルーブリックを設定するのである。

4 パフォーマンス評価を活用した実践

ここでは筆者の実践事例をもとにしながら中学校社会科におけるパフォーマンス評価の組み立て方などをお示しする。地理的分野大項目1「世界の様々な地域」中項目ウ「世界の諸地域」より「南アメリカ州」における実践である。「南アメリカ州に暮らす人々の生活のようすを、地域の自然環境や社会環境、産業などの事例をもとに、『進む開発と環境問題』という主題から地域的特色を理解するとともに、開発と環境保全の両立を実現し、持続可能な南アメリカ州の

あり方を他者と協働しながら主体的に考える」ことを単元の目標とした。帝国書院の教科書『社会科中学生の地理』p.88-99にもとづいて全6時間で構成した。

第1時	景観写真や地図やグラフを見ながら南アメリカ州の自然環境のようすを大観し、基礎的な事項を理解する。
第2時	グラフや分布図を活用しながら、南アメリカ州の民族のようすや歴史との関係を大観し、基礎的な事項を理解する。
第3時	資料を活用して、南アメリカ州の農業のようすや変化を読み取り、関連付けて南アメリカ州の農業の発展の特色を理解する。
第4時	資料を活用して、南アメリカ州の工業のようすや変化を読み取り、関連付けて南アメリカ州の鉱工業の発展の特色を理解する。
第5時	資料を活用して南アメリカ州の環境問題の実態や問題点を読み取るとともに、南アメリカ州の開発と環境保全の両立を多面的・多角的に考え表現する。
第6時	これまでの学習の成果を白地図入りのワークシートにまとめ、南アメリカ州の持続発展に向けての提言や行動を表現する。

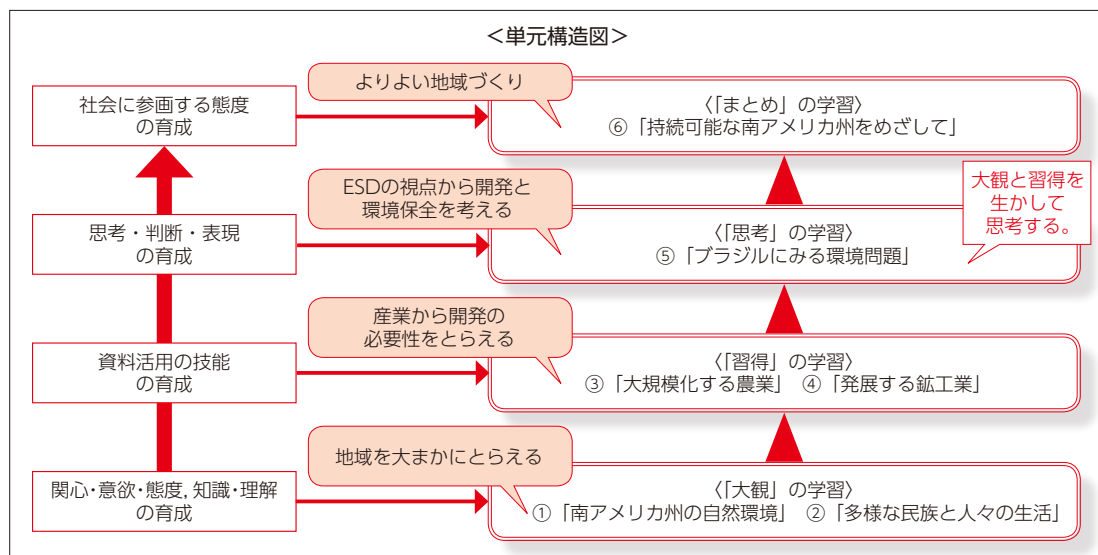
単元の構造は、第5時を軸として地域を大観したのち、開発の実情と恩恵を学習し開発と環境保全の両立をESDの視点で思考する構成で、「逆向き設計」論にもとづいて考えた。また第5時での学習課題をパフォーマンス課題として、ループリックにもとづき評価した。

導入	<ul style="list-style-type: none"> ・「フィッシュボーン」の写真を見て、これは何かを考える。(デジタル教科書p.99を活用)
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・「googleマップ」でアマゾン川周辺の開発の状況を観察する。(デジタル教科書のリンク) ・動画「アマゾンの森林破壊」を見て、森林破壊の進行を知る。 ・教科書p.97グラフ④「アマゾンの森林伐採面積の推移」を見て、森林破壊問題に対する問題解決が進んでいることを知る。(コンテンツを活用) ・資料を見て感じたことを、ワークシートに記入する。 ・さとうきび畑拡大の実態を教科書の本文から読み取り、その構図をワークシートの構図に記入する。(デジタル教科書を併用) ・「開発と環境保全どのようにして両立させるか」をグループで考える。 <p>【パフォーマンス課題①】</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループが考えた、開発と環境保全とのバランス策を提示し、学級全体で共有する。 ・本時の学習活動を生かして、開発と環境保全の両立を再度個人で考える。 <p>【パフォーマンス課題②】【ループリック】</p>

パフォーマンス課題①

(仮想) ブラジルでは、これからのよりよいブラジルのあり方をめぐり、開発推進派と環境保全派の二つに国内が分かれて対立が続いています。そこで、ブラジル政府は、国民から広くメンバーを集めて「よりよいブラジルのあり方会議」を設置しました。そしてあなたはこの会議のメンバーに選ばれ、ワーキンググループに参加することになりました。

ワーキンググループのメンバーであるあなたは、**開発推進派と環境保全派双方の意見をよく聞き、南アメリカ州の地域的特色を生かしながら、ほかのメ**



ンバーと協力して「開発と環境保全を両立させた、よりよいブラジルをめざすためのアイデア」を考え、その結果をワーキンググループ合同会議で提言してください。

パフォーマンス課題②

(仮想) ワーキンググループ合同会議で、各グループからの提言が報告されました。それを受けてあなたはブラジル大統領から、とくに個人としての考えを求められました。

あなたは、それぞれのグループの提言を参考にしながら、あらためてこの問題を多面的・多角的に考察し、個人としての「開発と環境保全を両立させた、よりよいブラジルをめざすためのアイデア」を大統領に報告してください。

ルーブリック

A	B評価の評価項目をすべて満たしつつ、1つ以上の点について、とくに優れていると判断されるものを含んでいるもの。
B	以下の4つの評価項目について、おおむね満たしていると判断されるもの。 ①よりよい地域をめざす持続発展的な考えである。 ②既習の学習成果を生かしている。 ③開発や環境保全の立場を踏まえながら両立案を考えている。 ④根拠を示し、考えを主張している。
C	B評価の評価項目について、とくに不十分と判断されるものが含まれていたり、全体的に不十分であると判断されるもの。

この授業でのパフォーマンス課題設定上の留意点は、まず「よりよいブラジルのあり方会議を設置し、生徒が地域の人としてこの会議のメンバーに選ばれた」という設定にしたことである。この設定により、ブラジルの問題を他人ごととせず、自身の問題という視点に立たせ、主体的に考えさせることをねらった。**パフォーマンス課題②**の「よりよいブラジルをめざすためのアイデアを大統領に報告する」という設定も同様である。

次に「開発推進派と環境保全派の二つに国内が分かれて対立しており、開発推進派と環境保全派双方の意見をよく聞く」という設定である。これは、既習事項である開発のよい面も踏まえ

ながらよりよい地域のありかたを多面的・多角的に考えさせる意図がある。「南アメリカ州の地域的特色を生かしながら」という設定も、既習知識を活用させるねらいをもっている。

ルーブリックの工夫は、パフォーマンスの特徴を、①よりよい地域をめざす持続発展的な考えである(持続可能な開発の視点)、②既習の学習成果を生かしている(習得－活用－探究のサイクル)、③開発や環境保全の立場を踏まえながら両立案を考えている(多面的・多角的な思考)、④根拠を示し、考えを主張している(論理性)、として評価の基準とした。基準の項目化は、評価を実施する際の客観性をより高めるための手立てである。

また、先行研究では、4～5段階で設定している基準を3段階にしたり、「とくに優れていると判断されるもの(A評価)」や「以下の4つの評価項目について、おおむね満たしていると判断されるもの(B評価)」と曖昧さを含めた表現にしたりしているのは、柔軟な評価ができるようにするための配慮である。これまでの評価では、ルーブリックにより客観性をもたせようとして数値的な基準を含めたり、限定的な基準を入れたりしたこともあるのだが、この基準が影響して、全体としては良好ではあるが、基準に達していないので評価が下がってしまったという事例があり、現在としては、このような形式を基本としている。

5 むすびに

紙面の関係から、今回の小論では説明しきれない部分もあり、読者の先生方にはさまざまな疑問や質問がわいてきたことであろう。その疑問や質問は、ぜひ次回以降のこの小論で解決していきたいと考える。この小論をきっかけとして読者の先生方もパフォーマンス評価について実践していただければ幸いである。